

10. 高知県立大学県民大学学生プロジェクト「立志社中」の採択と活動

1) 健援隊プロジェクトの活動

健援隊は、立志社中プロジェクト開始当初から設立され、今年度 10 年目の活動を迎える。健援隊の活動目的は、専門知識をわかりやすく地域の方に伝え、知識の普及と健康文化の醸成である。今年度は、1～4 回生まで 32 名の学生が活動を行った。

(1) 活動目標

- ① 香美市柳瀬地区、神池地区の住民の方々のセルフケア能力の向上を支援する
- ② 香美市柳瀬地区の防災訓練に参画し防災意識の向上と防災対策の充実を図る
- ③ 小児を対象に健康に関する知識の習得をはじめとした健康教育を行う
- ④ AED の知識や使用方法の普及を行う

(2) 活動内容

- ① 香美市柳瀬地区、神池地区の住民の方々のセルフケア能力の向上を支援する

隣接する神池地区と柳瀬地区は、病院までの距離が遠いこと、近隣に入院病床がないため、入院が必要になると住み慣れた地区を離れざるを得ないという医療上の課題がある。住民の方々は入院を防ぎ「住み慣れた地域で健康に暮らしたい」ということが健康ニーズの一つとなっている。そのため、体を温める食べ物、筋力維持の体操、血圧のしくみなどをテーマに神池便り・柳瀬便りを作成し送付した。また、継続して健康チェック表の作成と送付を 2 か月に 1 回行った。また、今年度は血圧や脈拍などの体調チェック、下肢筋力維持の体操、応急手当法について柳瀬地区の住民の方からの要望も踏まえて健康教室を開いた。参加者は地区の住民の方 8 名、メンバー 6 名であった。

- ② 香美市柳瀬地区の防災訓練に参画し防災意識の向上と防災対策の充実を図る

柳瀬地区の防災訓練に参画した。参加者は地区の住民の方 8 名、メンバー 6 名であった。主な活動は、地区の一時避難場所である公会堂で、防災無線の使用テスト、防災テントの立ち上げ、防災用トイレの確認などを地区の住民の方の高齢化により大規模な災害訓練は困難な状況であり、地区にある災害備蓄品を用いて住民の方とともに実施した。

- ③ 小児を対象に健康に関する知識の習得をはじめとした健康教育を行う

昨年度から活動させていただいている高知市五台山保育園に加えて、健援隊の活動の主旨をご理解いただいた高知愛児園でも今年度は活動を行った。

教育内容については、子どもたちの保育園での過ごし方、興味関心があることなど子どもの理解をした上で、教育内容を検討することに努めた。各保育園に訪問し計 4 回、子どもたちと共に遊び、保育園の日課に取り組む子どもを観察し、その結果、「歯の生え変わり」と虫歯について」「正しい手の洗い方について」学習会を行った。

- ④ AED の知識や使用方法の普及を行う

AED 講習に先駆けて、高知市消防局の協力を得てメンバーが救命講習を受講した。講習を受けて AED の使用においては、周囲への応援要請、AED と胸骨圧迫を併用することで効果が上がることなど、ポイントについて整理して、紅葉祭の参加者に対して AED を含む救命講習を行った。

(3) 活動の評価

- ① 香美市柳瀬地区、神池地区の住民の方々のセルフケア能力の向上の支援

地区にしながら自分の健康状態を知ることができる機会は、日頃から自身の健康管理に興味関心をもつ住民の方々にとって、新たなセルフケア能力の向上のきっかけ作りとなったと考えられた。

②香美市柳瀬地区の防災訓練

香美市柳瀬地区の防災訓練に参画し防災意識の向上と防災対策の充実を図ることについては、防災訓練への参画前に、事前調査として現地を訪問して地区の災害のリスク状況を共有、過去の災害時の様子を住民の方に紹介を受け事前に災害のイメージをもち防災訓練に参加することができた。防災訓練時は、地区の無線機の作動状況、防災テントの組み立て、備蓄品の確認を地区の方と一緒に実施した。ただし、防災対策の充実を図るための提案や具体的な活動には至っていない。

③小児を対象に健康に関する知識の習得をはじめとした健康教育

事前に五台山保育園と高知愛児園に事前調査として訪問し、園児の保育園での過ごし方を観察したことで子どもの行動、認知の特徴をふまえた教材作成に取り組むことができた。4回実施した学習会には10~20名の年長児、年中児の参加を得た。

(4) 今後の課題

より効果的な活動を行うため、学生の活動のタイミングと地域側の受け入れのタイミングがズレないように大学の年間行事、授業日程などと地域側のイベント等を踏まえた日程調整を早期から行いスケジュールを立てていく必要がある。活動への参加を促す方略について集団対応、個別対応など柔軟に検討していく必要がある。

メンバー間で活動量に差が生じていることから、年度の活動開始時にメンバーそれぞれに役割をもちメンバー間でこれまでの活動振り返り、地域や保育園についての情報共有、ディスカッションが行える仕組み作りが必要である。

2) いけいけサロン活動の活動

「いけいけサロン活動」は、看護学部4回生1名、3回生6名、1回生7名の計14名で活動する結成9年目のチームである。コロナ禍で対面での地域住民との活動が叶わなかった期間を経て、令和5年度はやっと地域住民の方との活動を行うことができた。今年度は、プロジェクトの目的を「共に歩む：学生は大学での学びや今までの活動を、住民の方は地域の暮らしや特性を、それぞれにいかし、これらを合わせた実現可能な活動をし、互いに楽しいと思える活動をする」とした。学生は、地域住民との直接の交流から学びたいという意欲を持って活動に望んだ。

(1) 活動目標

- ①昨年度の知り直し活動によって住民の方々との距離が縮まったということを活かして、より住民の方と学生と一緒に考え活動する
- ②互いに尊重しあい、楽しみながら安全に無理なく継続できる活動を行う
- ③一人一人を大切に、互いに安心できると思えるような活動を行う
- ④ひとつひとつの活動終了時に振り返りを行い、評価する

(2) 活動内容

上記4つの目標の到達に向け、以下の活動に取り組んだ。

① 毎月のチラシ配布の継続

池地域35世帯に、町内会と協力して、チラシの配布を行った。住民の方に、学生・大学を身近に感じて頂けるように学生の日常生活の話題についてチラシに掲載した。学生の実習や帰省期間を踏まえると、地域住民と直接会えない期間もあったため、チラシは地域住民がみて読んで楽しめるものを作成していた。

② 池地域でのサロン活動

3回の対面サロンを開催した。池公園、大学祭、池公民館でのサロンは、久しぶりの対面であり、1回生は初めて住民のみなさんと交流する機会となった。それぞれが名札を付けて自己紹介を行い、七夕の短冊づくりを住民の方と行い会話を楽しんだ。11月のサロン活動では、大学祭にて茶道体験を楽しんでいただいた。また、災害時の避難場所である大学に親しみを持ってもらうことを目的に学内散策を行った。公民館サロンでは、距離をとって会話を楽しみ、学生も住民の方も充実した時間を持つことができた。

③ 屋外でのサロン活動

三里地域の公園での花壇整備のお手伝いや、オーガニックマーケットでの池町内会の活動のお手伝いにも取り組んだ。これらの活動からは、若い世代の力や、住民同士のつながりが生活にとって重要であることを学んだ。

④ 地域で活動するにあたっての学内研修

1回生を対象に、10月に「地域で安全に活動するにあたって」というテーマで、担当教員とともに学内研修を行った。主には、学年に応じた倫理的行動をとることができるように、これまでこのチームが経験した事例をもとに、1回生がどのような行動をとるかをそれぞれに意見を出し合い、住民・学生それぞれの権利を擁護する行動をとることができるようにした。また、事故等の対応についても確認し、事務局との書類提出の意味などをおさえ、1回生メンバーだけでも安全に活動することができるように整えた。

(3) 活動の評価

① 毎月のチラシの配布の継続

1回生と3回生、4回生が協力して今年度も毎月かさかさ配布することができた。特に1回生ははじめての町内会との接点を持ち、締切や持参の仕方などを上級生や住民から学び、日常の地域社会生活のなかでの活動成果を実感することができた。

② 池地域でのサロン活動、屋外でのサロン活動

それぞれのサロン活動で、学生は高齢者である住民との会話の仕方や、健康管理の方法、生活上の工夫を理解し、それをふまえた活動を検討することができた。それぞれの学年が専門科目での知識を生かし、案を持ちよったサロンを行うことができた。

③ 地域で活動するにあたっての学内研修

1回生メンバーのみでの活動に向けて実施し、地域で活動する準備性を高めることができた。

(4) 今後の課題

令和5年度は年3回の対面サロンを行うことができた。学生は、なんとか住民の方と学生の「つながり」をつくりたいと、感染症対策を十分に行ったうえで、多様な活動を発案し積極的に取り組むことができた。学生は、「地域へ入る」ことについて、3回生・4回生のサポートのもと1回生も、看護を学ぶ学生としての基本的な倫理的行動をとることができるように学び合っていた。コロナ禍を経て、住民の方、特に高齢者が感染症によってどのような経験をしてきたか、生の声を聴くことができたことで、学生ができること、住民の方ができることをお互いに理解することに向けて、活動できたように感じる。コロナ禍で変化した、このチームと池地域ならではの活動の仕方を再構築し、丁寧に活動できる体制づくりが求められると考える学生と住民で協働する活動による、創造性を存分に発揮できる支援の仕方を模索し、学生自身が看護を学ぶなかで、この地域での活動の意義を自ら考えられるように支援することが望まれる。

3) UOK 手話サークル活動の活動

「UOK 手話サークル」は、結成 4 年目のサークルで、令和 5 年度より立志社中プロジェクトとして活動している。昨年までは、コロナ禍の中、オンラインで他大学の学生と手話活動について語ることが中心であったが、本年度より、看護学部 16 名、社会福祉学部 37 名、健康栄養学部 4 名の計 57 名で聴覚に障害をもつ方と直接語り合うことで、聴覚障がい者を理解し手話の技術を習得することを目標に活動を行った。

(1) 活動目標

- ① 地域の方に聴覚障がい者を取り巻く現状・課題を理解してもらうことができる
- ② 手話をより多くの方に理解してもらうために啓発することができる
- ③ 災害時の聴覚障がい者の支援について考えることができる
- ④ 継続して手話を学び続け、手話の技術を習得することができる

(2) 活動内容

- ① 地域の方に聴覚障がい者を取り巻く現状・課題を理解してもらうことができる

看護学校や社会福祉の専門学校、高校などに案内をし、高知医療センター（8 月 27 日）と高知県立大学池キャンパス（9 月 24 日）にて、聴覚障がい者を主人公とした映画「咲む」の上映会と聴覚障がい者のトークショーを開催した。また、「聴覚障がい者の日常生活の困りごと」「聴覚障がい者と災害・防災」「手話通訳について」「手話の作り方」について、手話通訳士や当事者から講演を行ってもらった。この講演会は、高知新聞に掲載予定を掲載していただき、地域の方の参加も呼びかけた。

- ② 手話をより多くの方に理解してもらうために啓発することができる

11 月にふくしフェア 2023 に参加し、来場者に「地域で生活している聴覚障がい者は気付かれ難い」ことについて絵を用いて説明をしたり、「手話で挨拶」を実際に行ってもらったりした。また、11 月には高知新聞に「UOK 手話サークル」の紹介がされ、同世代の若者に手話に興味をもってもらえるようにメッセージを送った。

- ③ 災害時に聴覚障がい者が困ること、それに対する支援について考えることができる

高知県立大学版シミュレーションゲームを行い、聴覚障がい者の避難者対応について検討を実施した。要配慮者の配置、掲示版の位置について話し合い、避難者カードおよびイベントカードを使いながらシミュレーションを進めていった。

- ④ 継続して手話を学び続け、手話の技術を習得することができる

手話通訳士の資格を有する他県の大学生に、手話を始めるきっかけや手話通訳士になるまでの勉強方法などを学び、手話の表現で分からないことなどを教示してもらった。

(3) 活動の評価

- ① 「咲む」の映画上映は、参加人数は少なかったが、地域の方だけではなく聴覚障がい者の方、手話を学ばれている方も参加していただくことができた。聴覚障がい者だけではなく障がいに対する周囲の人と当事者それぞれの思いがすれ違いながらも歩み寄っていく様子が描かれ、地域共生の必要性を感じた映画であったとの意見も聞かれた。また、講演会は、高知新聞に広告を掲載したことで、一般の方からも参加希望があった。参加者からは、「聞こえないことで生じる日常生活のしづらさを知るとともに、工夫次第でそれらを少なくすることもできることを学んだ」や「手話を表現することの大変さと楽しさを知れた」などの意見が聞かれた。

- ② ふくしフェア 2023 では、多くの方に来場いただき、身近に聴覚障がい者の方がいることや手話での挨拶を実施したことで多くの方に聴覚障がい者について理解をしてもらうきっかけになった。また、高知新聞に UOK 手話サークルの活動について掲載してもらったことで、「保育園に通園する子どもが手話に興味をもった」とのメールを大学にいただくなど幅広い世代に手話を知ってもらうきっかけになった。
- ③ シミレーションゲームでは各学部の学生が専門的な視点から考えることができた。「本番は、何人もの人を対応しないといけないので、ひとり一人にあった対応が難しい」などの意見もあった。また、災害時の要配慮は聴覚障がい者だけではないため、他の障がい者や高齢者、子どもなどへの配慮も必要になることを学ぶことができた。
- ④ 手話通訳士として活動されている大学生から直接、手話の表現を学ぶことで手話の奥深さと難しさを学び、これからの手話技術習得の励みにつながった。

(4)今後の課題

令和 5 年度は立志社中として初めての活動であったが、積極的に活動を進めることができた。特にふくしフェアでは、予想を超える来場があり、手話に興味をもってもらう機会につながった。しかし「咲む」の映画上映は参加者が少なく、地域の方々に聴覚障がい者の理解してもらうには至らなかった。今年限りで理解を深めることは困難であるため、聴覚障がい者の方々や地域住民の意見を聞きながら共に活動を継続していくことができるように支援することが必要である。また、限られたメンバーのみの活動となっているため、メンバー全員が活動に参加できるようなシステム作りも急務である。